

小動物臨床における漢方薬の活用 —古典的診断から統合医療へ—

The use of Kampo medicine in small animals
(From traditional medicine to integrated medicine)



橋本昌大

Yoshihiro HASHIMOTO

高草山どうぶつ病院

Takakusayama animal clinic

症例を用いて動物における漢方薬の活用を考察し、漢方治療の古典的診断から統合医療への展開を検討する。

【症例 1】

子宮蓄膿症手術後に十全大補湯を投与。舌の白色化、裂紋の出現から気血両虚と判断し、補気補血の十全大補湯を使用。十全大補湯は、「手術による衰弱」「全身衰弱」の適応であり、抗癌剤の副作用軽減などで広く使用されている。

【症例 2】

慢性膀胱炎に補中益気湯を投与。胃腸機能がもともと弱く、心身ともにストレスに弱いことから気虚と判断し、補中益気湯を中心に治療。胃腸機能の向上と体重の増加と共に膀胱炎・尿石症の再発が消失。

【症例 3】

慢性下痢症の犬に補中益気湯を投与し、消化器症状の改善と体重増加が認められた。

【症例 4】

寒冷のため起立不能となった高齢犬。急激な冷え込みにより四肢の運動機能が低下した例であり、寒邪を取り除き、身体を温める真武湯を投与。胃腸機能の改善と心肺機能・運動機能の改善が認められた。

【症例 5】

パルボウイルス感染症に真武湯投与。

【症例 6】

過敏性腸症候群の犬の胃腸炎に真武湯投与。

【症例 7】

慢性胃腸炎の犬に参苓白朮散を投与。

【症例 8】

問題行動を起こす犬の胃腸炎に小建中湯または加味逍遙散。

【症例 9】

興奮により過食・異食を起こす犬に半夏瀉心湯投与。

【東西医学の統合治療】

症例 1 に代表されるように手術後や病後の体力回復などに漢方を併用する機会が多い。西洋薬（新薬）に漢方を加えることで副作用を軽減する例も多く、実際の臨床では東西の治療の融合がほとんどを占める。

【治病求本】

病気を発症させている本質を探ることを意味する。対症的な治療薬にとどまらず、体質を改善させることにより再発を防ぐ。治療の目的は本治を目指す。（症例 2.3）

【異病同治】

異なる病気に同じ治療が適応されることがある。症状が異なっても真武湯により代謝を改善し血液循環を改善することで治療する。（症例 4.5.6）

【同病異治】

同じ症状であっても治療が異なる。下痢の症状でも症例により原因が異なり、治療が異なる。（症例 3.7.8.9）

【古典的診断から統合医療へ】

最新の医学、獣医学の知見は、漢方治療にも不可欠。しかし、古典的な五感を使った診断は、本院の治療には重要な役割。動物の表情、姿勢、しぐさ、習慣、歩き方などから身体や病態の特徴をさぐる東洋医学の知恵を活用したい。漢方治療を多くの動物病院で活用するためには、古典的な用語を現代の科学者と共有するための工夫が重要な課題であろう。

橋本昌大の略歴

獣医師

高草山どうぶつ病院 院長

鳥取大学農学部獣医学科卒業

青年海外協力隊、京都 YMCA 職員、ミクロネシア・

ポナペ オア高校教師を経て

小動物臨床に従事